

# 英語指導者を対象にした多読に関する質問紙調査から —予備的研究—

今村 一博\*

## A Preliminary Study Based on a Questionnaire Survey of English Teachers on Extensive Reading

Kazuhiro IMAMURA\*

### ABSTRACT

This pilot study uses a questionnaire survey to investigate the methods used by English teachers at junior and senior high schools in Japan to make their students read extensively, the effects teachers expect from extensive reading, and why some teachers do not make their students read extensively. The results showed that some of the teachers do not make their students read extensively because they do not know how to do so and because they think extensive reading is not suitable for their students. The results also revealed that many junior high school teachers do not give their students opportunities to read extensively and that teachers who think the academic level of their students is low tend not to make the students read extensively. Finally, it was found that many teachers expect extensive reading to improve their students' speed of reading, attitude and motivation regarding English and English education, and speed of recognition of words.

*Keywords* : extensive reading, questionnaire, teachers, junior high and high school, *kosen* (college of technology)

### 1. はじめに

日本の学校教育における英語多読に関する研究は増えてきているが、英語の指導者を対象とした質問紙調査による研究は依然として少ない。その中の一つである山崎は小学校、中学校、高校、大学の英語指導者を対象に多読指導に関する郵送による質問紙調査を行った<sup>(1)</sup>。この調査の対象に高専の指導者は含まれていないが、近年で初めて、日本の小学校から大学まで多くの学校の指導者を対象に英語多読に関する大規模な調査をしたものである。小学校の調査結果を割愛し、中学校から大学までの調査結果を示す(表 1)。結果としては、中学では、教科書以外の読み物を読ませているのは 33.3 パーセントに留まった。中学校で生徒が読むものを選んで読む形式をとっていたのは、わずか 5.6 パーセントであった。高校では、教科書以外の読み物

を読ませているのは 70.8 パーセントであり、教科書しか読ませない学校が、29.2 パーセントあった。高校で生徒が読むものを選んで読む形式をとったのは、15.4 パーセントであった。大学においても、多読を実施していたのは 35.7 パーセントに留まった。

表 1 中学校、高校、大学での英語多読指導に関する郵送による質問紙調査結果 (山崎)

	中学校 <i>n</i> = 72	高校 <i>n</i> = 65	大学 <i>n</i> = 98
教科書以外の読み物を読ませた	33.3%	70.8%	
学習者が読むものを選んで読んだ	5.6%	15.4%	---
多読を実施した	---	---	35.7%

一方、今村において、3つの私立大学、2つの国公立大学の大学生(1・2年生 446人)を対象に行った在籍した高校の英語多読指導に関する質問紙調査(表 2)によ

\* 一般科 教授

れば、高校で英語多読を行ったのは、全体で 12.3 パーセントと少なかった<sup>(2)</sup>。学習者が読むものを自分で選んで多読を行ったのは、3.8 パーセントとさらに少なかった。大学ごとに見ると、ばらつきが見られ、高校で多読を行ったのは、最も低い率の A 大学生(私立)で 5.0 パーセント、最も高い率の D 大学生(国立)で 21.1 パーセントであった。

今村で指摘されたように、大学生を対象に行った在籍した高校での多読指導について尋ねた質問紙調査の「学習者自身が図書を選んで多読をした」という質問項目に対する 3.8 パーセントと比較すると、山崎の質問紙調査の「学習者自身が読むものを選んで読んだ」に該当する高校生が 15.4 パーセントという割合はかなり高い<sup>(1)(2)</sup>。これは、今村の質問紙調査では、「多読をした」という言葉が使われている一方、山崎では単に「読んだ」という言葉になっていて、この違いに起因している可能性も考えられる<sup>(1)(2)</sup>。しかし、山崎の質問紙調査が郵送による調査で、回答して回収された数を発送数で割った回収率は、高校で 32.5 パーセントと、ほぼ 3 分の 1 であることから、山崎の調査結果は多読に関する指導を積極的に行っている学校または先生からの回収率が高いために、全体として多読に関して高い数値が示されている可能性も考えられる<sup>(1)</sup>。しかしながら、いずれにせよ、山崎及び今村の調査結果から、日本では、中学から大学まで、10 年間にわたる英語教育において、多読指導は十分に行われていないことが多いことが判明した<sup>(1)(2)</sup>。

表 2 大学生を対象に行った在籍した高校の多読指導に関する質問紙調査結果

	高校で多読を行った	高校で学習者自身が図書を選んで多読を行った
A 大学生(119 人)	5.0%	0.8%
B 大学生(121 人)	5.8%	1.7%
C 大学生(57 人)	19.3%	10.5%
D 大学生(142 人)	21.1%	5.6%
E 大学生(7 人)	14.3%	0.0%
全体(446 人)	12.3%	3.8%

注：A・B・C は私立大学，D は国立大学，E は公立大学

## 2. 本研究の特色

本研究では、英語指導者を対象に多読に関する質問紙調査を実施した。この質問紙調査は、指導者が国内のある教育委員会にほぼ無作為抽出されたと言ってもよい条件で集合した際に実施したものであり、このほ

ぼ無作為と言える条件が極めて重要だと考えられる。それは、英語教育の分野においても、学会や研究会に参加する指導者に質問紙調査を実施したところ、英語教育の理論や実践に関心がある指導者が多いためか、実態よりも明らかに高いと思われる数値が出てしまうといった事例がしばしば起こっているが、そうしたことと無縁な条件であるからである。また、前項「1. はじめに」で述べた通り、質問紙調査を郵送で行った場合、回収率が低くなることや、返送する回答者がその質問紙で尋ねている内容に関心を持っていたり、実際に実施していたりすることが多い可能性は否定できない。そのため、被験者がほぼ無作為抽出されたと言ってもよい条件で質問紙調査を実施できる機会は極めて少ないという点で、本研究の質問紙調査は貴重だと考えられる。

また、前項で述べた通り、英語指導者を対象とした多読に関する質問紙調査は多くなく、実施された質問紙調査も多読の実施率を調査する程度に留まっているものが多い。そこで、本研究ではさらに多読の効果に関する指導者の考えや、多読をしなかった場合の理由に関しても調査した。

## 3. 本研究の目的

本研究は、参加者(被験者)の数は多くはなかったが、前項で述べた通り無作為抽出されたのに近い条件で集まった中学・高校の指導者を対象とした質問紙調査を行い、筆者が実施する計画をしている高専の英語指導者を対象とする質問紙調査の予備的研究とする。さらに、高専に入学してくるのは中学卒業生であるが、中学生に対する多読指導の状況、高専の低学年(1~3 年生)と同年齢である高校生に対する多読指導の状況、及び中学・高校の英語指導者の多読に関する考え(信念, belief)を調査することを目的とする。

## 4. 研究方法

4.1 参加者 中学校の英語指導者 25 人，高校の英語指導者 21 人，合計 46 人が参加者であった。

4.2 調査方法 紙ベースで作成した質問紙調査(「資料」参照)を参加者に配布し、質問項目に回答してもらい、後に統計処理を行った。

## 5. 結果と考察

### 5.1 学習者の英語習熟度レベル

英語指導者から見て、生徒の英語習熟度に関して、「大変高い」が 2.2 パーセント(1 人)、「どちらかと言えば高い」が 19.6 パーセント(9 人)、「どちらとも言えない」が 23.9 パーセント(11 人)、「どちらかと言えば低い」が 30.4 パーセント(14 人)、「大変低い」が 17.4 パーセント(8 人)、「回答せず」が 6.5 パーセント(3 人)という結果であった。指導者が全

体としては生徒の習熟度をやや低く評価していることがわかった。

**5.2 多読の実施状況** 多読指導を過去 10 年以内に実施したのは 46 人中の 19.6 パーセント(9 人)に留まった。内訳を見ると中学校の指導者では 25 人中の 8 パーセント(2 人)、高校の指導者では 21 人中の 33.3 パーセント(7 人)というように、中学校よりも高校の方が高い割合で多読指導を行っていた。

そこで、統計的有意差があるかどうか調べるために、参加者が多くないことからノンパラメトリック検定である  $\chi^2$  乗検定によって検定を行ったところ、

$\chi^2 = 4.768$ ,  $p = .029 < .05$ ,  $\phi = .33$ (効果量中)

となり、5 パーセント水準で有意差があることが明らかとなった。統計的有意差をもって、中学校の指導者よりも高校の指導者の方が多読指導を行っている者が多いことが分かった。しかし、高校の指導者も多読指導をしているのは、3 人に 1 人の割合なので、中学校の指導者で多読指導をしている者が極端に少ないことが明らかとなった。

**5.3 多読の方法** 多読の方法に関して、多読指導を行った指導者 9 人は、複数回答方式で、「長期休暇中や学期中に、授業外で、指定の多読用図書を読ませた」と回答した指導者が最も多く、55.6 パーセント(5 人)であった。次いで、2 番目に「長期休暇中や学期中に、授業外で、多読用図書を生徒自身に選ばせて読ませた」が 44.4 パーセント(4 人)、3 番目に「授業中に、指定の多読用図書を読ませた」が 33.3 パーセント(3 人)、最後に「授業中に、多読用図書を生徒自身に選ばせて読ませた。」が 11.1 パーセント(1 人)と続いた。全体の傾向としては、授業中よりも授業外で読ませていることが多いことが分かった。授業時間数を重視する近年の状況から見ても授業外で多読をするのは妥当な結果だと考えられる。

**5.4 多読を実施しなかった理由** 多読指導を過去 10 年以内に実施しなかった 37 人の英語指導者を対象に、多読指導を実施しなかった理由を複数回答可で答えてもらったところ、「勤務する学校の生徒に適した指導と、考えないから」という理由が最も多かった(35.1 パーセント, 13 人)。次いで、2 番目に「多読指導をする方法を知らないから」(29.7 パーセント, 11 人)、3 番目に「多読指導の実施について、全く考えもしなかった」(27.0 パーセント, 10 人)、4 番目に「忙しいので、多読指導の準備等をする時間があまりないから」(18.9 パーセント, 7 人)、5 番目に「多読指導に関心があったが、なんとなく実施しなかった」(13.5 パーセント, 5 人)が続いた。一方、「多読に効果があると、あまり考えないから」(0 パーセント, 0 人)、「精読の方が、効果があると考えるから」(8.1 パーセント, 3 人)という

ように多読の効果を否定して多読指導を行わないとする指導者はほとんどいないことが分かった。つまり、多読指導の効果を認めながらも、自分の生徒たちの指導には適していないと考える指導者、また多読指導の方法を知らない指導者、なんとなく特に大きな理由はなく多読指導を実施しない指導者が多いことが明らかとなった。

多読が平均的な英語習熟度の高校や、上位と見られる高校の生徒を対象にして、英語読解力が高い方の群の学生だけでなく、低い方の群の生徒も、多読によって読む速さや読む正確さが向上したという実証的研究はある(橋本他<sup>(3)</sup>, Imamura<sup>(4)</sup>)。しかし英語習熟度が特に低い生徒・学生を対象とした実証的研究は少ないと見られるので、そうした生徒・学生を対象とした実証的研究を行っていく必要がある。また、多読指導の方法について知らない指導者も多いので、その方法を学べるワークショップや研修を増やしていく必要があることも分かった。

**5.5 期待される多読の効果** 全ての参加者(46 人)を対象にした期待される多読の効果に関する回答では(複数回答可)、「速読力」が最も多く(52.2 パーセント, 24 人)、過半数を超えた。次に「英語や英語学習に対する態度・動機づけ」(39.1 パーセント, 18 人)及び「英単語を見てその意味が認識できる力」(39.1 パーセント, 18 人)が多かった。これらは、橋本他、今村、Imamura 等の実証的研究の結果とほぼ一致しており、指導者が学習者を指導する中で経験的に知ったり、研究会や英語教育関係の文献等を通じて知ったりしていると思われる<sup>(3)(4)(5)</sup>。しかし、一方では 19.6 パーセント(9 人)の指導者が無回答で、多読の効果に関してあまり意識をしてない指導者も多いことが明らかとなった。

**5.6 学習者の英語習熟度レベルと多読実施状況の関係** 英語指導者から見た生徒の英語習熟度(5.1 参照)と多読の実施状況(5.2 参照)に関係があるかを調査することにした。まず、生徒の英語習熟度は質問紙では 5 段階に分かれていたが、人数比も考慮して、①「大変高い」、②「どちらかと言えば高い」を『高い』、③「どちらとも言えない」、④「どちらかと言えば低い」、⑤「大変低い」を『低い』の 2 つの群に分けた。そして学習者の英語習熟度レベルと多読実施状況のクロス表を作成したところ(表 3)、習熟度が低い生徒を対象に多読が全く実施されていないことがわかった。

そこで、統計的有意差があるかどうか確認するために、参加者が多くないことからノンパラメトリック検定である  $\chi^2$  乗検定によって検定を行ったところ、

$\chi^2 = 10.297$ ,  $p = .001$ ,  $\phi = .49$ (効果量中)

となり、1 パーセント水準で有意差があることが明らかとなった。統計的にも「習熟度の低い」学習者よりも、「習熟度の

高い」学習者を対象にしてより多く多読指導が実施されていることが確認された。

表3 Q4と修正Q2のクロス表(人数)

		Q2(2群に分類したQ2)		合計
		『習熟度高い』	『習熟度低い』	
		Q4	多読実施	
	多読実施せず	13	22	35
	合計	21	22	43

## 6. 本研究の限界, 今後の研究, 教育的示唆

参加者が少なかった点が, 本研究の大きな限界であった。本研究は予備的研究であり, 「2. 本研究の特色」で述べた通り, あまり多くない機会を捉えて得られた参加者であるのでやむを得ない点ではあるが, 今後このような無作為抽出に近い状況でより多くの参加者を得ることができれば, 英語指導者に対する質問紙調査をすることが望まれる。また, 質問項目を増やして, 多読指導を行っている指導者にはより詳しく多読指導の方法や状況について尋ねることも期待される。さらに, 面接をすることができれば, より細かい部分まで把握することができると考えられる。

また本研究から, 中学生に対する多読指導, 習熟度が低いと見られる学習者を対象とした多読指導があまり行われていないことが示唆された。こうした学習者を対象に多読指導を行い, 多読の影響を多面的に調査することが喫緊の課題であると考えられる。

教育的示唆としては, 高校や高専に入学してくる中学生の多くが多読の経験がなく, 学校ではほとんど教科書しか読んできていないものと考えて指導の計画をする必要がある。中学校がそうした状況であるために, まずは高校や高専での多読, 読む量を重視した指導が重要と考えられる。

多読の方法に関しては, 授業外で行う方法が現在も多い状況で, 今後も授業時間数が大きく増えることは期待しにくいと思われるので, 授業外で行う効果的な指導法を研究していく必要がある。そのためには, 指導者が多読指導を行って, 指導法に関して調査を行い, 結果を積極的に発表していくことや, 多読指導者間で情報を活発に共有していくことが望まれる。

「5.4 多読を実施しなかった理由」で述べた通り, 実施しなかった理由の2番目に「多読指導をする方法を知らないから」, 3番目に「多読指導の実施について, 全く考えもしなかった」, 4番目に「忙しいので, 多読指導の準備等をする時間があまりないから」, 5番目に「多読指導に関心があったが, なんとなく実施しなかった」と続き, 多読指導の方法を知らなかったり,

周囲で多読指導をしている指導者がいないためか, 多読指導についてほとんど考えられていなかったりするケースが多いと見られる。「5.5 期待される多読の効果」でも述べた通り, 多読の効果に関して, 経験的にもしくは文献等を通じて知識として知っている指導者も多いが, 一方で全く知らないケースも多いと見られる。これらの点から, 指導者が, 多読指導の方法に関するワークショップに参加したり, 多読に関する文献に目を通したりすることが望まれる。

## 7. 最後に

英語教育における質問紙調査の回答者が英語指導者である場合は, 質問紙を配布して回答してもらい調査か, 郵送で回答を依頼して行う調査かによって, また研究会や学会の会員や参加者を対象とする調査を行うか, 無作為抽出に近い条件の回答者を対象とする調査を行うかによって, 結果が大きく異なってくることが少なくないと考えられる。近年, 英語教育分野において, 統計手法に関心が集まり, 研究が増加してきているが, 統計処理をする前の重要な段階である, 回答者をどのように選ぶかという点にも関心が高まり, 研究が進められることが期待される。

## 参考文献

- (1)山崎朝子:「多読指導の現状: 科学研究の成果 平成18年度~19年度科学研究費補助」, 第34回全国英語教育学会東京大会発表資料, 2008.
- (2)今村一博:「多読が単語・コロケーション・定型句・反義語の認識(アクセス)速度に及ぼす影響」. *Language Education & Technology* (外国語教育メディア学会紀要), 第48号, pp. 185-214, 2011.
- (3)橋本雅文, 高田哲朗, 磯部達彦, 境倫世, 池村大一郎, 横川博一:「高等学校における多読指導の効果に関する実証的研究」, 『STEP BULLETIN』, 第19号, pp. 118-126, 1997.
- (4)Imamura, K.: (2008). The effects of extensive reading for Japanese high school students on their reading and listening abilities, vocabulary and grammar. *ARELE*, Vol. 19, pp. 11-20, 2008.
- (5)今村一博:「高校生に対する多読指導と情意, 使用する読解ストラテジーの認識との関係—縦断的研究—」, *Language Education & Technology* (外国語教育メディア学会紀要), 第44号, pp. 87-106, 2007.

## 資料

「多読指導について」のアンケートのご協力をお願い

[前文省略]

下記の[ ]内において、最も近いと考えられるものに○をつけてください。また、その他の質問にお答えください。

◇現在勤務されている学校は、

Q1[ ①中学・②高校 ]で、だいたいと言うならば、生徒の英語力のレベルについては、

Q2[ ①大変高い ②どちらかと言えば、高い ③どちらとも言えない ④どちらかと言えば、低い ⑤大変低い ]状況である。

◇先生ご自身は、何らかの『多読』指導(例えば、「リーディング・マラソン」や、長期休暇中に、英語の読み物を沢山読ませる等は、『多読』指導の一つと考えることにします。本アンケートでは細部に拘るよりも、読む量を重視した読みを多読と定義します。)を、過去10年以内に、

Q3[ ①実施した ②実施しなかった ]

Q3で、「①実施した」と答えた方は、次のQ4にお答えください。(Q4の後、Q5に答えずにQ6へ)

Q3で、「②実施しなかった」と答えた方は、Q4は答えずに、Q5にお答えください。(Q5の後、Q6へ)

Q4 多読指導を実施した内容は次のどれでしょうか。(複数回答可:当てはまるもの全部に○をつけてください。)

[①長期休暇中や学期中に、授業外で、指定の多読用図書を読ませた。

②授業中に、指定の多読用図書を読ませた。

③長期休暇中や学期中に、授業外で、多読用図書を生徒自身に選ばせて読ませた。

④授業中に、多読用図書を生徒自身に選ばせて読ませた。

⑤その他(具体的に )]

Q5 多読指導を実施しなかった理由は、次の中のどれでしょうか。(複数回答可:当てはまるもの全部に○をつけてください。)

[ ①多読に効果があると、あまり考えないから

②勤務する学校の生徒に適した指導と考えないから

③精読の方が、効果があると考えから

④忙しいので、多読指導の準備等をする時間があまりないから

⑤多読の本の費用がない

⑥多読の本を貸し出す点で、困難を感じるから

⑦多読指導をする方法を知らないから

⑧多読指導に関心があったが、なんとなく実施しなかった

⑨多読指導を実施したかったが、同僚の賛成や協力が得られなかった

⑩多読指導の実施について、全く考えもしなかった

⑪その他(具体的に )]

Q6 多読の効果により、次のどのようなものが向上すると、考えておられますか。(複数回答可:当てはまるもの全部に○をつけてください。)

[①英語や英語学習に対する態度・動機づけ

②精読力

③速読力

④文法力

⑤英単語を見てその意味が認識できる力

⑥日本語を見て、英単語のスペリングを書く力

⑦リスニング力

⑧その他(具体的に )]

Q7 多読について特に詳しく知りたいと思っておられることがありましたら、ご記入ください。(具体的に )